



## あたまをつかった 小さなおばあさん

ホープ・ニューウェル作  
 松岡享子訳 山脇百合子画  
 福音館書店 1970年(7月) 1935)

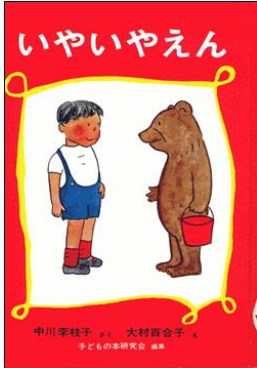
昔、あるところに小さなおばあさんが一人で住んでいました。お金はないけれど、頭を上手に使って幸せに暮らしていました。例えば、高価な羽布団を買う代わりに、12羽のがちょうを買います。夏は卵が、冬は羽布団が手に入るというわけです。「私は何て頭がいいんだらうねえ」と一人悦に入りますが、いざ羽根をむしる時には、がちょうが寒かろうと心配になり、また名案を考えつく、そんな愉快なおばあさんのお話が10話入っています。



## あらしのよるに

木村裕一作 あべ弘士絵  
 講談社 1994年

嵐の夜、同じ小屋の中に雨宿りをするようになったヤギとオオカミ。外では雨風が吹きすさび、中は真っ暗闇。姿のわからない二匹は同じ仲間同士だと思えます。しかし、話がはずんで食べ物のことになると、ヤギには飢えたオオカミが、オオカミには柔らかいヤギの肉が感じられてきたのです。そこに一瞬の稲妻。光で小屋の中全体が照らし出されますが、眩しさに目がくらみ、姿はわからないまま…。さあ、二匹はどうなるのでしょうか？ 気になる結末にこたえて「あるはれたひに」など、続編が4作もつくられました。



## いはいやえん

中川李枝子作 大村百合子絵  
福音館書店 1962年

しげるは4才、ちゅーりっぶ保育園に通う男の子です。たくさんある保育園のおやくそくを、なかなか守ることができません。やんちゃで元気なしげるを主人公に、子どもたちの様子が空想を交えて生き生きと描かれています。発表された時、子どもの目線で書かれた新鮮で画期的な作品だと話題になりました。古い言葉づかいもありますが、子どもの本質に変わりはないはず。保母体験のある作者の、子どもをとらえる目が温かです。



## エルマーのぼうけん

R・S・ガネット作 R・C・ガネット絵  
渡辺茂男訳  
福音館書店 1963年(7月)1948)

若いころ冒険家だったという猫にすすめられて、エルマーは動物島へりゅうの子を助けに行きます。みかん島でお弁当代わりにリュックにみかんをつめこみ、動物島に侵入してからは、サイやライオンなど猛獣たちにつぎつぎと会いますが…。危ないところでりゅうの子の背に乗って空から脱出したエルマー。空を飛びたかった願いもかなえられます。はじめの長編に出会う幼児にぴったりの、たのしくスケールの大きい冒険ファンタジーです。「エルマーとりゅう」「エルマーと16びきのりゅう」と、話はさらに舞台をひろげてつづきます。



## 大きいツリー 小さいツリー

ロバート・バリー文・絵 光吉夏弥訳  
大日本図書 1977年 (7月) 1963)

もうすぐクリスマス。ウィロビーさんのお屋敷では大広間に大きなツリーをたてましたが、先っぽが天井につかえてしまいます。そこでツリーの先をちょんぎり小間使いの部屋へ。そこでも余ったツリーの先は庭師の家から、森の動物たちの家へと次々ともらわれてゆき、喜んで家に飾られます。最後にねずみがもらって飾ったところは…？ 大きな家でも小さな家でもそれぞれツリーを囲んで楽しくクリスマスを祝う、ほほえましいお話です。



## おさるのまいにち

いとうひろし作・絵  
講談社 1991年

さるたちは南の小島に住んでいます。日が昇ると目を覚まし、食べたり木登りしたり水浴びしたり。そして夜になると眠ります。次の日も、その次の日も…。たまたま海の向こうからやって来るウミガメのおじいさんが見えると大さわぎ。めずらしい旅の話が聞けるのです。おじいさんが疲れていたらゆっくりと待ちます。さるたちの暮らしぶりも、くり返される言葉もゆったりとして満ち足りた気持ちになれる不思議な本です。他に「おさるはおさる」「おさるになるひ」などがあります。



## おしれのぼうけん

古田足日・田畑精一作  
童心社 1974年

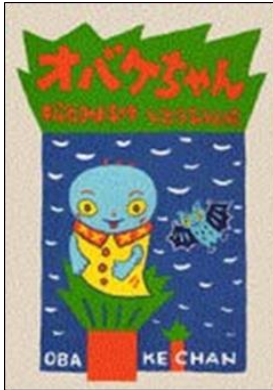
さくら保育園にはこわいものが二つあります。一つは押入れ、もう一つはねずみばあさんです。おひるねの時に騒いださとしとあきは反省するようにと押入れに入れられます。不気味な暗闇の中に、突然ねずみばあさんの声が響きます。泣きそうになった二人は夢中で手をつなぎ押入れの冒険に出発します。主人公と一緒に思わず汗をかいてしまうスリル満点の物語です。どのページにも迫力あふれる絵があり、素敵な結末へと導いてくれます。



## おそうじをおぼえたがらない リスのゲルランゲ

J・ロッシュ=マゾン作  
山口智子訳 堀内誠一画  
福音館書店 1973年(ワソ 1930)

小さなリスのゲルランゲは掃除が大嫌い。兄たちを怒らせ、とうとう、掃除を覚えたくないなら出ておゆきとおばあさんに追い込まれます。家を出るなり狼にばったり。食べられてもいいけど掃除は覚えたくないという強情です。掃除もできんリスを食うわけにはいかんと、狼は森の仲間もまきこんで子リスの教育に乗り出します。それでも掃除は覚えないとがんばる子リスに振り回され、なんとも滑稽な意地の張り合いになります。絵も楽しめます。他に「けっこんをしたがらないリスのゲルランゲ」があります。



## オバケちゃん

松谷みよ子作 いたうひろし絵  
講談社 1991年(1971 小薊江圭子絵)

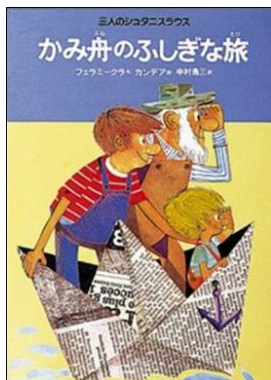
オバケちゃん一家が静かに暮らす森に、木を全部切ってしまうという人間が現れたからさあ大変。友達のコウモリたちと協力し、火の玉に化けて人間をおどしますが、かえってお金もうけに利用されてしまう始末。困ったオバケちゃんたちのもとに宇宙おばけセンターからのふしぎな声が…。いかにもおばけ的な解決がユニークです。欲張りな人間は懲らしめられるし、宇宙おばけは現れるし、と、子どもへのサービスは満点。他に「オバケちゃん学校に行く」などがあります。



## かいぞくオネション

山下明生作 長新太絵  
偕成社 1970年

オネションは昔の海賊船の船長。とても強い海賊だけど、ときどきオネショをするのです。オネショのシムはドクロのマーク。時は現代、団地に住むヒロ少年は、日曜日の朝オネショをしました。すると突然、窓に大きなマンボウが現れて、ヒロは海に出かけることになりました。ヒロのスーツもドクロのマーク。ヒロは海賊オネションとして迎えられるのです。そしてノコギリザメと勝負することに…。作者の、海への愛情が感じられるお話です。



## かみ舟のふしぎな旅

ヴェーラ=フェラミークラ作 中村浩三訳  
ロームルス・カンデア絵  
偕成社 1967年(オーストリア1962)

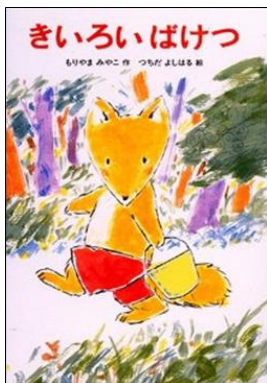
おじいさんとお父さんと男の子は3人もシュタニスラウスという名前です。日曜日の朝、配達されたあさっての新聞で紙舟を折って川に浮かべます。すると不思議、紙舟はぐんぐん大きくなり、3人は川下りの冒険に出発。望遠鏡をのぞくと山の上のお城がとんできたり、紙舟の穴を切手でふさいだりと空想の世界がつつきつ広がります。調子よく繰り返される名前や、のびのびと無邪気に冒険を楽しむ3人のシュタニスラウスの様子が愉快です。続編に「はらべこのえんそく」があります。



## 火よう日のごちそうは ひきがえる

ラッセル・E・エリクソン作  
ローレンス・D・フィオリ画 佐藤涼子訳  
評論社 1982年(アメリカ1974)

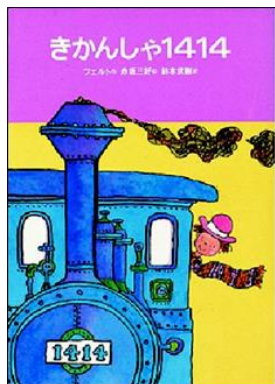
掃除好きのウォートンと料理好きのモートンはひきがえるの兄弟です。ある雪の日、ウォートンはおばさんにお菓子を届けに行く途中みみずくにつかまってしまいます。今度の火曜日はみみずくの誕生日。このままじゃ誕生日のご馳走にされちゃう！とウォートンはあれこれ知恵を絞って逃げようとしますが…。ハラハラドキドキと読み進むうちに、動物たちの勇気と友情に心が温かくなってきます。ユーモラスな挿し絵もいい味わいです。このシリーズは「消えたモートンとんだ大そうさく」など4冊出ています。



## きいろいばけつ

森山京作 土田義晴絵  
あかね書房 1985年

きつねのこんすけは、丸木橋のたもつとでバケツを見つけます。前から欲しかった黄色いバケツです。一週間待って誰も取りに来なかったら自分のものにしようと思ひます。どしゃぶりの雨にぬれたバケツを見て悲しくなったり、バケツに棒きれで、名前を書きまねをしたり…。黄色いバケツと過ごす時がゆっくりと穏やかに過ぎ、いよいよ自分のものになると思ひたその日、バケツは誰かに持ち去られていました。でもこんすけは満足です。他に、「つりばしゆらゆら」「あのこにあえた」などがあります。



## きかんしゃ<sup>いちよんいちよん</sup>1414

フリードリヒ=フェルト作 鈴木武樹訳  
赤坂三好絵  
偕成社 1968年(ドイツ1963)

小さな機関車1414は、61年もの間、二つの駅の間を行ったり来たりするだけの毎日に、ほとほとあきあきし、くたびれてしまいました。ある晩、やさしい機関士アルフレートにお休みをもらって旅に出ます。途中、病気の妹のために奇跡の青い花を探す男の子を乗せ、氷の原まで大冒険。始発に間に合わないといらいらして待つ駅長のもとに、すっかり元気になって帰ってきます。ちょっとクラシックな、心温まる乗り物ファンタジーです。



## きつねものがたり

ヨセフ・ラダ作・絵 内田莉紗子訳  
福音館書店 1966年(元1937)

森番の家に飼われていたきつねは、本を読んでもらっているうちに人間の言葉を覚え、自由な森へ飛び出します。食べ物に困り、昔話のきつねのまねをしてみますが、失敗ばかり。でもくじけません。電話の使い方を覚えたきつねは、さっそく肉屋を手玉にとり、ハムをさらって大得意。一躍有名になります。その上、森番になれそうだと聞き、さっそく森に行き練習をはじめますが…。だんだん知恵をつけてくるきつねの奮闘ぶりが愉快です。

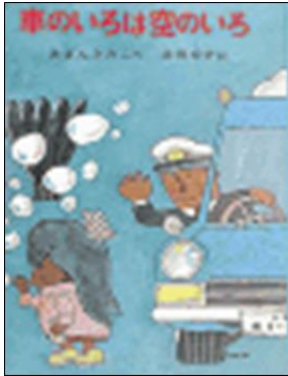


## くまの子ウーフ

神沢利子作 井上洋介絵  
ポプラ社 1969年

いつも無邪気な質問を投げかけてくる、くまの子ウーフ。パンは何でできているの？ 椅子は？ と疑問は広がるばかり。ある日、卵を産むメンドリを見て、その体は卵でできていると思ひ込みます。それではウーフの体はなにからできているのかと、きつねのツネタに聞かれ困ってしまいました。素朴さやユーモアだけでなく、今ここにいることの確かさを感じさせてくれるのがくまの子ウーフです。続編も多数作られ、絵本でも出版されています。また、くまの子ウーフは座間市立図書館のマスコット！ どうぞよろしく。

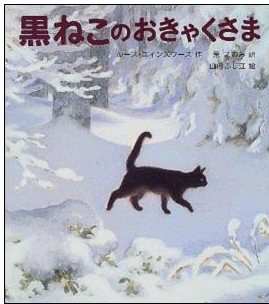




## 車のいろは空のいろ

あまんきみこ作 北田卓史絵  
ポプラ社 1968年

松井さんはタクシーの運転手。車は空色、ぴかぴかです。お客を乗せたつもりが、クマだったり、山猫だったりして、いつのまにか不思議な世界に入りこむことがあります。狐を乗せた時には仲間扱いされ、うまく人間に化けたと、コンクールで一等賞までもらってしまいます。八つの短編から成っていますが、どれも不思議な世界との行き来が自然で、日本的な新しいファンタジー作品の登場と賞賛されて以来、その魅力は色あせていません。続編もでています。



## 黒ねこのおきやくさま

ルース・エインズワース作  
荒このみ訳 山内ふじ江絵  
福音館書店 1999年(14' 訳 1963)

寒い嵐の晩、貧しいおじいさんの家にやせた黒ねこが入ってきました。震えるねこのためにおじいさんは自分の食べ物すべてを与え、大切な薪も使い果たします。つぎの朝、毛もツヤツヤになって、去っていく黒ねこ。ところが、こな雪の上には、何の足あとも残っていませんでした。そして、空っぽになったはずの食器や、まき入れの中には…。心の満足という抽象的なテーマをわかりやすい語りと淡い色調の水彩画で静かに伝えています。



## けしつぶクッキー

マージェリー・クラーク作 渡辺茂男訳  
モードとミスカ・ピーターシャム絵  
ペンギン社 1981年(原刊1924)

アンドルーシク坊やは、カチューシカおばさんが市場へ行くあいだ、留守番をたのまれました。おばさんの焼いたけしつぶクッキーを動物たちにとられないように見張りをするのです。でも、ぜんぶがちょうに食べられてしまって…。昔話のような出し、筋の軽快さ、愉快的な結末に至るまで、まさに幼年文学の典型です。今も読み継がれているのは、お話と絵の素晴らしさはもちろん、おばさんのクッキーが、あまりにおいしそうだからでしょう。



## 元気なポケット人形

ルーマー・ゴッデン作 猪熊葉子訳  
アドリエヌ・アダムズ絵  
岩波書店 1979年(原刊1955)

人形のジェインの望みは、ポケットに入って外を見ること、冒険をすること。けれど持ち主の女の子たちはジェインを人形の家にしまいこんだまま。そんなある日、少年ギデオがジェインを気に入って持ち去ります。それから人形はおもちゃのヨットに乗ったり、空を飛んだり、夢のような日々を送ります。ギデオは盗んだことを恥じて、人形を返そうとしますが…。どんな時でも自分に素直に生きようとするジェインの姿が共感を呼びます。



## ごきげんなすてこ

いとうひろし作

徳間書店 1995年（福武書店 1991）

弟が生まれてお母さんは大忙し。女の子はご機嫌斜めです。そこで、自分だけをかわいがってくる家を探そうと捨て子になることにしました。捨て子になった犬と猫とカメと一緒にもらい手を待ちますが、もらわれていくのは動物ばかり。意地っ張りでプライドの高い女の子も次第に心細くなってきます。自ら捨て子になろうと言う発想は痛快で、その気持ちをしっかり受け止めている両親も素敵です。絵からも女の子の気持ちが伝わってきます。続編に「やっかいなおくりもの」「にぎやかなおけいこ」があります。



## こぎつねルーファスのぼうけん

アリソン・アトリー作 石井桃子訳

キャサリン・ウィグズワース絵

岩波書店 1979年（貸し 1954）

子ぎつねのルーファスは森のみなしご。ある日、泣いているところを、やさしいあなぐまの母さんに拾われます。早速、あなぐまの子どもたちの先頭にたって奔放に遊びはじめるルーファス。とまどいながらも、あなぐま一家は温かく受け入れていきます。星や月、白鳥の魔法の冠、それに、悪い大ぎつね。幻想的な美しさも見える森は、つねに危険ととなり合わせです。森のことを知り尽くした作者が生み出したドラマはスリルもたっぷりです。続編に「こぎつねルーファスとシンデレラ」があります。



## こぐまのくまくん

E・H・ミナリック文 モーリス・センダック絵  
松岡享子訳

福音館書店 1972年(7月) 1957)

雪の降る日、外へ遊びに出かけようとしたくまくん。ところが外に行きかけると、寒いからと戻ってきます。そのたびにお母さんは、帽子、オーバー、ズボンと次々用意してくれます。それでも寒いからと毛皮のマントまでほしがりますが…。くまくんは、最後に自分の毛皮がいちばん温かいと気づき、元気に外へとび出していきます。くまくんを優しく包みこんでくれるお母さん。子どもは、くまくんに自分を重ねて幸せな気持ちになるでしょう。他に「くまくんのおともだち」「だいじなとどけもの」があります。



## こちらゆかいな窓ふき会社

アアルド・ダール作

清水達也・清水奈緒子訳

クエンティン・ブレイク絵

評論社 1989年(11月) 1985)

どんな高いところにある窓も、キリンの首がぐんぐん伸びてはしご代わりに。ペリカンが水を運び、サルが窓を拭く。そんな「はしご不用窓ふき会社」とピリーは出会います。ピリーたちは、初仕事のハンプシャー公爵のお屋敷で、宝石どろぼうを発見。ペリカンがくちばしの中にどろぼうを捕まえます。さて、公爵からお礼に貰ったものは…？ カラフルで軽妙な絵とともに、テンポよく話は展開し、不思議で愉快な世界に連れていってくれます。



## ジョシ・スミスのおはなし

マグダレン・ナブ作

立石めぐみ訳 垂石眞子絵

福音館書店 1997年(貸) 1988)

小さなジョシは、空きびん集め、畑仕事、みみず探しに八百屋の掃除と、泥だらけになってかせいだお金を手に花屋さんに向います。ところが、冬の花は思いもよらぬ高値で、目当ての花は、花束どころか一輪さえも買えないありさま。どうしよう、今日はお母さんの誕生日。夕暮れが迫ります。何の贈り物も用意できず、泣きべそをかきながら家に帰るジョシでしたが…。素敵な結末に、心がふっと温まる。そんなお話が三つそろいました。



## ターちゃんとルルちゃんのはなし

このまへの にちようび 1

たかどのほうこ作/絵

アリス館 1996年

なわとびで、通りに走り出たターちゃんは心細げな女の子に声をかけられます。女の子はルルちゃん。おばさんの家を訪ねてきたものの、目じるしのお花屋さんが見当たりません。そこで通りかかった女の子に思い切って道を尋ねてみたのです。二人のドキドキの出会いと交流が、それぞれを主人公とした二つのお話を一つに結びつけました。互いの一日にさわやかな印象を残した一つの出来事が、二人の目を通して描かれるという手法が新鮮です。このシリーズは他に「モイクんとカーボくんのはなし」「トコちゃんとタムくんのはなし」があります。



## たんだのたんてい

中川李枝子作 山脇百合子絵  
学習研究社 1975年

ある朝、郵便受けの新聞が、にんじん歯みがきにすり替わっていました！？さあ大変、事件発生です。にんじんがすきなのはうさぎ、と推理して、たんだがうさぎのギックのところへ行ってみると、なんと今度はギックの歯みがきがかゆみ止めに替わっているではありませんか。そのチューブには、ねこの毛とうろこが…。新聞は？ 犯人は？ 次々と展開していく事件。たんだの追跡は続きます。はたして、事件は無事に解決できるでしょうか。他に「たんだのたんけん」があります。



## ちいさいモモちゃん

松谷みよ子作 菊池貞雄絵  
講談社 1964年

モモちゃんはママが働いているので、1歳になると「赤ちゃんの家」に通うようになります。時には泣きたくなることもあります。猫のプーもいっしょだし、ボーイフレンドもでき、楽しいこといっぱいあります。仕事をもつ母親から見た、モモちゃんの3歳になるまでのさまざまなエピソードが、ファンタジーをまじえ、ゆったりした語り口で綴られた短篇連作です。「モモちゃんとプー」「モモちゃんとアカネちゃん」他、モデルの成長とともに生まれてきたシリーズは、1992年に「アカネちゃんのなみだの海」で完結しています。



## 小さなスプーンおばさん

アルフ=ブリョイセン作 大塚勇三訳

ビョールン=ベルイ画

学習研究社 1966年(ルウエ-1957)

田舎に住む平凡なおばさんは、時々突然ティースプーンくらいに小さくなってしまいます。そのあいだはおばさんは動物と話ができます。小さくなっちゃったんなら、それでうまくやらなきゃと、あわてず騒がず、動物や雨風をうまく使って仕事をすっかりかたづけます。カラスの女王になったり、自分がおもりをしていた赤ん坊の人形になったり… おばさんの身に次々と起こるおかしい事件を、知恵をしぼって切り抜けていく楽しいお話です。



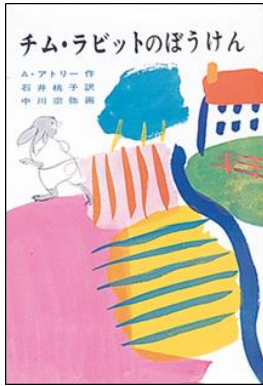
## ちびドラゴンのおくりもの

イリーナ・コルシュノフ作

酒寄進一訳 伊東寛絵

国土社 1989年(ドイツ1978)

小学校の落ちこぼれ、ハンノーと、ドラゴン学校の落ちこぼれ、ちびドラゴンが会います。ちびドラゴンは、好奇心旺盛で甘えん坊。ハンノーがやることを何でもやりたいとせがみます。歌や絵やでんぐり返しや木登り。どれも苦手なハンノーですが、仕方なく教えることになります。ふたりで夢中になって練習するうちに、ハンノーはいろんなことができるようになりますが…。ちょっと切り切れないけれど、勇気がわいてくるお話です。



## チム・ラビットのぼうけん

アリソン・アトリー 作

石井桃子 訳 中川宗弥 画

童心社 1967年 (作 1937 他)

子うさぎのチム・ラビットは、見ることも聞くことはじめてのことばかり。風が吹いても、雷が鳴っても、犬に追われても、その度にお母さんのところに逃げこみます。ある時、はさみを拾ったチムは、それを使って何でも切れることを知り、毛布もカーテンも、なんでもかんでも切り刻んでしまいます。おもしろくなって、とうとう自分のふわふわの毛まで刈ってしまったって…。どんな怖い目にあってもお母さんが受けとめてくれるから安心です。他に「チム・ラビットのおともだち」「サム・ビッグだいかつやく」などがあります。



## ながいながいペンギンの話

いぬいとみこ 作 山田三郎 画

理論社 1967年

南極の冬が終わるころ、ペンギンの兄弟が生まれました。元気なルルと寒がりのキキです。怖いもの知らずのルルは、キキの心配をよそに、どんどん外に出ていっては危険な目に遭います。その度に助けてくれるものが現れますが、ルル自身も勇敢に行動します。そんな中で思いやりの心も育み、つぎの冬がやってくる頃には、心身ともにたくましく成長しています。動物を主人公とし、冒険と友愛と成長と、魅力的な要素が揃った長編童話です。





## なぞなぞのすきな女の子

松岡享子作 大社玲子絵  
福音館書店 1973年

なぞなぞ遊びの相手を探しに森に行ったら、お昼に食べる子どもを探している狼に出会ってしまった女の子。賢い女の子は狼に謎を出し、自分のことだと判らない、とんまな狼が目をつむって考えている間に家に逃げ帰ります。子兎が恐る恐る狼に答えを教えてやりやりとり面白く、怒った狼が女の子を家まで追いかけて行って…と、話は軽快なテンポで進みます。どの頁にもゆったりとした明るい挿絵が入っていて読む楽しさを増しています。



## なん者ひなた丸 ねことんの術の巻

齊藤洋作 大沢幸子絵  
あかね書房 1989年

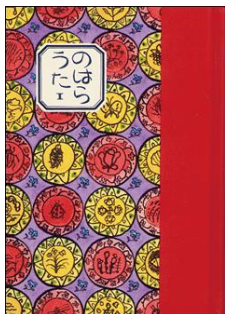
ときは戦国時代、ところは何田の国にん者村。お城の家老が殿様の命を受け、仕事の依頼にやって来ました。出払ったにん者に代わり、隣国、堂田の偵察を任されたのは、にん者見習のなん者ひなた丸。できる忍術は唯一「ねことんの術」。とはいえ、子どもならではの発想と行動力、運の良さも手伝って数々のピンチを切り抜けます。頼りなさも魅力のうち。にん者への昇格を目指す元気なひなた丸を応援する読者は多く、人気のある読み物です。ひなた丸の活躍はシリーズで楽しめ、他に、「なん者ひなた丸 白くもの術の巻」など多数あります。



## ねこのホレイショ

エリナー・クライマー文 阿部公子訳  
ロバート・クアッケンブッシュ絵  
こくま社 1999年 (アメリカ 1968)

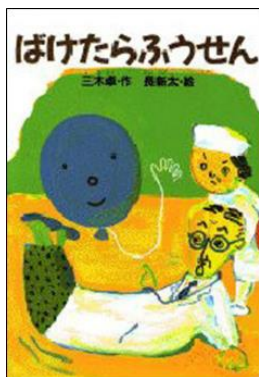
しかめつらのおじさん猫ホレイショは、かわいがられるより尊敬を込めて扱って欲しいと思っていました。優しくて人のいい飼い主のケイシーさんがいろいろな動物や子供たちを家に入れるのが気に入りません。家を出たまま、思わず遠くに来てしまいます。おなかがよくわ、捨て猫になつかれるわ、散々な一夜を過ごした後で、仲間がいたりかわいがられたりするのもいいな、と思うようになりました。緑とオレンジの版画がしゃれています。



## のはらうた I, II, III, IV

工藤直子作  
童話屋 1984~2000年

「どんぐりが ほとほとり / やぶのなか  
ころころり / のねずみが ちろちろり /  
おいしいぞ かりこりり (こねずみしゅん)」  
「のはらむら」の住人と称する作者が「のはらみんなのだいにん」となって編んだ詩の本です。動物や鳥や虫、風や池、小川などに名前がつけられています。それぞれの特性もちゃんと掴んでいて、わかりやすい言葉で書かれていますので、身近な友人のおしゃべりを聞いているような楽しさがあります。



## ばけたらふうせん

三木卓作 長新太絵  
講談社 1978年

青い風船が、病院にやってきました。次々と  
いろいろなものに化けているうちに、そもそも  
初めは何だったのか、わからなくなってしま  
ったということです。院長先生は、レントゲン  
や脳波、おならを調べてみますが、どうして  
もわかりません。でも、風船の声をどこかで  
聞いたような気がします。夜中に目を覚まし  
た先生は、天井を見てびっくり。謎解きの面  
白さで一気に読ませます。風船のように、の  
んびりして、ユーモラスなお話です。



## はじめてのキャンプ

林明子作・絵  
福音館書店 1984年

みんなの反対を押し切って、なほちゃんは、  
大きい子たちのキャンプに仲間入りをします。  
重い荷物を一人で運び、川で尻もちをついて  
も、涙をぐっとこらえます。ごはん炊きのま  
き集めも大奮闘。そんながんばりに、もう誰  
も「ちっちゃいこは だめ」なんて言いません。  
みんなが寝静まった夜、おしっこに起き出し  
たなほちゃん。暗闇の中、一人見上げる星空  
に、流れ星がひとつ。小さな身体に、たくさ  
んの自信をつけた、はじめてのキャンプです。



## 番ねずみのヤカちゃん

リチャード・ウィルバー作  
 松岡享子訳 大社玲子絵  
 福音館書店 1992年(7月)1963

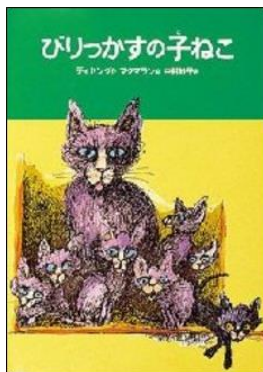
母さんねずみと4匹の子ねずみは、ドドさんの家の壁の隙間に住んでいます。でも、大きな声の子ねずみ「やかましやのヤカちゃん」にみんなハラハラ。ドドさん夫婦はねずみに気づき、畏をしかけたり猫を飼ったりしますが、ヤカちゃんが大声で知らせてしまいます。ある晩、ドドさんの家に泥棒が入ると…。語るためのお話として親しまれてきただけに、声に出した方が楽しめます。ヤカちゃんの声が響く度に、子どもたちは大喜びします。



## ひょうのほんやり おやすみをとる

角野栄子作 いせひでこ絵  
 講談社 1990年

ひょうのほんやりは、いつもほんやりしています。動物園の暮らしは毎日同じことの繰り返しだからです。そんなある日、休みをもらって散歩に出かけます。ところがせっかく挨拶しても町みんなは逃げだすばかり。挨拶を返してくれたのはおばあさんだけです。利口で働き者だとおだてられ、おばあさんの家で、しっぽや前足を使って大掃除やお洗濯をするために。でも、お茶の時間になると…。思いがけない展開が愉快です。



## びりっかすの子ねこ

マインダート=ディヤング作 中村妙子訳  
ジム=マクマラン絵  
偕成社 1966年(7月)1961)

七番目に生まれた子ねこはいつもお腹をすかせ、寒さに震えていました。ある時、目の見えない年寄り犬の温かいあごの下に居場所を見つけます。ミルクも半分こ。寂しかった老犬は子ねこをかわいがり、子ねこも幸せでした。ところがある日、子ねこは遊びすぎて迷子になります。いろいろな目に遭いながら、一晩中、家を探してさ迷う子ねこ。翌朝、やっとたどり着いた七軒目の家に現れたのは？動物や人への深い愛情が感じられる作品です。



## ふたりはともだち

アーノルド・ローベル作 三木卓訳  
文化出版社 1972年(7月)1970)

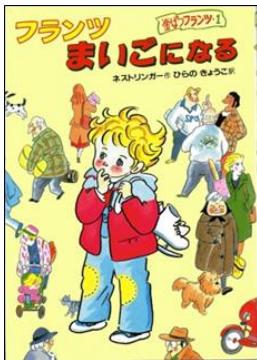
がまがえるくんは夕方になると悲しくなります。毎日手紙を待っているのに、一度も手紙をもらったことがないからです。それを知った友達のかえるくんは手紙を書いてかたつむりに配達を頼みますが…。(「おてがみ」)  
ちょっと短気ながまくんと真面目なかえるくんは犬の親友です。こまった時には二人で悩み、嬉しい時は一緒に喜びます。お互いのあるがままを受け入れている二人の友情は、読む人をほっとさせてくれます。他に「ふたりはいっしょ」「ふたりはいつも」「ふたりはきょうも」があります。



## ふとんかいすいよく

山下明生作 渡辺洋二絵  
あかね書房 1977年

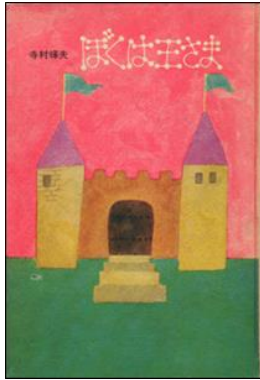
想像をめぐらすということはなんて素敵なことでしょう。耳だけがでて今年の水に入れないカズぼう。お父さんはそんなカズぼうを海水浴に誘います。部屋の中にふとんをしき、隅にはふとんを重ねた飛び込み台までつくりました。海水浴場のできあがりです。青いふとんは海の色、赤い模様はサンゴ礁。そこで泳ぎ方を教わり、深い海に潜るのです。お父さんとカズぼうだけの想像の世界。海の深さが愛情の深さにつながるようなお話です。



## フランツまいごになる

クリスティーン=ネストリンガー作  
平野卿子訳 ゆーちみえこ絵  
偕成社 1989年(ドイツ1984)

フランツは6歳。女の子と間違えられるのが悩みの種です。男の子だとわかってもらうためにケンカになることもあります。ある日フランツは、お兄ちゃんにスケートに連れて行ってもらいますが、市電に乗っているうちに迷子になってしまいます。線路づたいに必死におにいちゃんを捜しますが…。何をするにも一生懸命のフランツ。現代の都会っ子フランツの日常生活が身近かに感じられるお話です。続編7冊では、フランツが成長していく様子や、家族や友だちが描かれ、シリーズで読む楽しみがあります。



## ぼくは王さま

寺村輝夫作 和田誠絵  
理論社 1961年

卵焼きが大好きなわがままな王さまは、ソウの卵の卵焼きを作れとか、つぶれないしゃぼん玉を作れとか、いつもいばって命令します。ついた「うそ」を、ばれないようにと、そっとオルゴールの中にしまったり、おなかをこわした時はお医者さまのところに行くのがいやで逃げ出したり…と人さわがせ。その度にお城の人たちはててこまい。国をあげての大騒動になってしまいます。でも、どこか憎めない、だれかさんによく似た王さまです。他に「王さまばんざい」など多数あります。



## ポリーとはらぺこオオカミ

キャサリン・ストー作 掛川恭子訳  
マージョリー=アン・ワッツ絵  
岩波書店 1979年(作り1955)

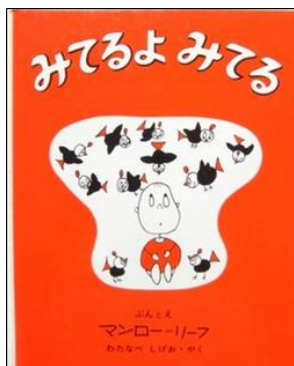
黒い大きな狼は、いつもお腹をすかせています。そして、小さな女の子ポリーの前に現われては「くってやるぞ!」と言っておどめますが、かしこいポリーは知恵を働かせて、いつも退散させてしまいます。昔話の「赤ずきん」や「三びきの子ぶた」などを手本にしても、失敗! おいしい手料理にだまされて、失敗! まぬけな狼はどうしてもポリーを食べることができません。大真面目なのに、どこかずれている狼の会話が愉快なお話です。



## みしのたくかにと

松岡享子 作 大社玲子 絵  
こくま社 1998年

ふとっちょおばさんが見つけた1粒の種。なんだかわからないけど庭にまき、〈…とにかくたのしみ〉と札を立てます。馬車で通りかかった王子様は、この札を反対に読んでしまいます。その後、王子様は勉強ばかりの毎日とうんざりして、ついにハンガーストライキ。そこでふとっちょおばさんは、王子様が欲しがる「みしのたくかにと」をもってお城に行き、王子様をたちまち元気にしてしまいます。その素敵な方法とは？ とにかくたのしみ。



## みてるよみてる

マンロー・リーフ文・絵 渡辺茂男訳  
学習研究社 1969年 (アマガ 1946)

〈これはいじめっこ〉と漫画風な絵で、猫の上に座り込み尻尾をつかんだ男の子が描かれています。自分のことかとドキッとさせる読者に、いじめっ子は嫌われる・なぜ嫌われるのかをユーモアたっぷりに簡潔な文で説明し、最後に、君は今日いじめっ子じゃなかったかい？ と問いかけます。ふくれんぼ・つげぐちまじょ・こわしや… 子どもが欠点に自分で気がついて直して欲しいという気持ちで書かれた本ですが、それでも子どもは大好きです。他に「おっとあぶない」「けんこうだいいち」があります。





## ミリー・モリー・マンデーのおはなし

ジョイス・L・プリスリー作

上條由美子訳 菊池恭子絵

福音館書店 1991年(伴訳1928他)

ミリー・モリー・マンデーは小さな女の子。草ぶき屋根の白いきれいな家に住んでいます。お父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃん、おじさん、おばさんも一緒に。お手伝いをしたり、友達と楽しく過ごしたり…。ひと昔前のイギリスの小さな村での日常生活、周囲の大人にたっぷり愛情を注がれて毎日を過ごしている女の子の姿が生き生き伝わってきます。70年も前に書かれたお話ですが、今も読み継がれているのがうなずけます。



## もう、なかない

丘修三作 西村繁男絵

教育画劇 1990年

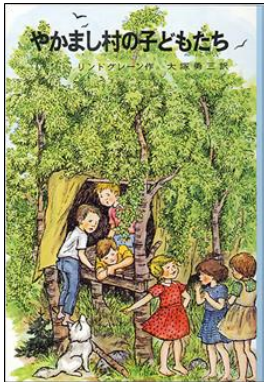
カオリは一年生。大好きなお兄ちゃんと同じ色の、黒いランドセルを背負うのがうれしくてたまりません。ところが女の子のランドセルは赤にきまっていると友達にからかわれ、とうとう学校を休むようになりました。お母さんが赤いランドセルを探してきてくれましたが、やっぱり黒が好きだとカオリは思うのです。迷ったり、涙をこぼしたりもしましたが、自分で考えてきちんと決めていく姿に、少女の心の成長が感じとれます。



## ももいろのきりん

中川李枝子作 中川宗弥絵  
福音館書店 1965年

るるこは大きなももいろの紙でキリンを作りました。名前はキリカ。大きすぎるため、窓から首を出して眠りますが、雨にぬれて、色がはげてしまいます。クレヨン山のクレヨンの森で、体を塗り直そうとしますが、欲張りなオレンジ熊がじゃまをします。でも力持ちのキリカがオレンジ熊を懲らしめ、るるこは森の動物たちのはげた色をきれいに塗り直してやります。レモン色のサルや空色のウサギなど、自由で鮮やかな色の世界が広がります。



## やかまし村の子どもたち

アストリッド・リンドグリーン作  
大塚勇三訳 イロン・ヴィークランド絵  
岩波書店 1965年（スウェーデン1947）

スウェーデンの田舎にあるやかまし村には家が3軒、子どもは6人しかいません。村での子どもたちの遊びや学校生活を、中屋敷の末娘リーサが生き生きと語ります。大きな木を伝わってお互いの家を行き来したり、干し草置き場でほらあなを掘って遊んだり、カブラぬきのお手伝いをしたりと、半世紀ほど前の子どもたちの遊びは素朴です。ゆったりと時間が流れる村で、思う存分遊ぶ子どもたちの満ち足りた顔が見えてくるようです。続編に「やかまし村の春・夏・秋・冬」「やかまし村はいつもにぎやか」があります。



## ゆうかんなハリネズミ マックス

ディック・キング＝スミス作  
金原瑞人訳 津尾美智子画  
あかね書房 1994年(貸) 1987)

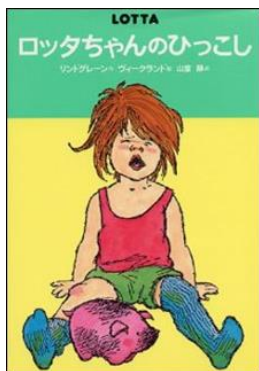
イギリスの町なかのある庭にハリネズミの家族が住んでいます。庭の外は車がよく通る道路で、その向こうにおいしい食べ物がいっぱいある公園があります。でも車道を渡るのは危険です。ハリネズミの子マックスは、道や人や車の流れをよく観察し、安全に車道を渡ろうとなんどもなんども挑戦します。小さなマックスが無事に横断できる方法は？ ハリネズミの生態もわかる都会の冒険話です。



## 雪だるまのひみつ

ルース・エインワース作 河本祥子訳・絵  
岩波書店 1991年(貸) 1970)

大雪の翌日、ピッパは門のわきに雪だるまを作ります。雪だるまににんじんの口をつけたら、何としゃべり出しました。ピッパは雪だるまにピーターキンと名づけ、知っている限りのお話を聞かせたり、おしゃべりを楽しんだりします。やがて二人は真夜中に雪だるまの集会に行き、歌ったり遊んだりして過ごします。そして暖かくなり、別れの時がやってきました。雪だるまは溶けてしまいますが、姿を変えて生き続けるラストがさわやかです。



## ロッタちゃんのひっこし

アストリッド=リンドグリーン作  
イロン=ヴィークランド絵 山室静訳  
偕成社 1966年 (スウェーデン1962)

5歳のロッタは、自分では熊と思っている豚の縫いぐるみが、夢で兄さんたちにぶたれたのを本当だったと思いこみ、朝から不機嫌です。腹たちまぎれに、ちくちくするセーターを切り刻み、あげくの果てに隣のおばさんの物置の二階に引越します。でも、ずっと住むつもりが夕方になると…。大人にはわがままに見えても、子どもにすれば理由のあること。ユーモアたっぷりに対応する大人の愛情の深さが、読む子どもの心を温かく包みます。他に「ちいさいロッタちゃん」などがあります。

### 昔話について

第四集には、昔話集はあえて選びませんでした。特定の一冊を推薦することがむずかしかったからです。でも、先人たちが営々と語り継いできた昔話には、人生がまるごとつまっています。昔話をたくさん聞くことでバランス感覚が自然に身につく、事に当たって道を切り開く力が養われるとは、よくいわれることです。

ところで、口伝えで伝承されてきた昔話は、読むより聞く方がふさわしいようにできています。

昔話は本来、地域に根ざした話を地域の言葉で語ってきました。そのため方言で書かれた昔話集も沢山出ていますが、読みにくいものを無理してそのまま読むことはありません。

日本の昔話はもちろんのこと、外国の昔話もたくさん出版されています。子どもに聞かせたいと思った話が、語りやすい言葉だったら、そのままでもいいし、語りにくいところは、自分の語りやすい言葉で語り直してみてください。昔から、人々は昔話を耳で聞き、頭の中に描かれたイメージにしたがって、自分の言葉で語り継いできたのです。自分の言葉で語り直せる—そこが、創作文学との違いです。

どれが面白そうかいいろいろ試してみるのに、図書館は便利です。おおいに図書館を利用してください。

剣持弘子 (昔話研究家)